

ぼくの町のたからもの ―平之荘能舞台―

ぼくは、半年ほど前に加古川市のこの町へやってきた転校生だ。

前に住んでいたところにくらべると田んぼや畑ばかりで、初めはびっくりしたけれど、新しい友達もでき、学校にもなれてきた。

二月の、ときどき雪がふる寒い日だった。ぼくたちは、六年生の狂言発表会を見学するため、学校の近くの平之荘神社へ行った。

「寒い。早く学校へ帰りたい。狂言なんて見たことも、聞いたこともないし。」
ぼくはそう思っていた。

神社には、全校生とお父さんやお母さんたち、そして地いきの人々がたくさん来ていた。中には加古川市以外の遠いところからのお客さんもいて、三百人ほどが集まっていた。

六年生が狂言の練習をしているのは知っていたけど、目の前で見るのは初めてだった。

開始前に、宮司さんが話をしてくれた。それによると、平之荘神社は八百年ぐらい前の鎌倉時代から続く古い神社だという。その神社の能ぶたいを使って、十年ほど前からぼくたちの小学校の六年生が毎年、狂言発表会をしているそうだ。そして、

「狂言は昔の笑い話をおしばいにしたようなものです。楽しんでくださいね。」
と言った。

「こんなに寒くちゃ楽しめないよ。早く終わってくれ。」

ぼくは心の中でさけんでいた。

不思議なのは、ぼくのクラスの仲間たちが、文くも言わずに、なんだか楽しそうに待っていることだった。だれも寒いとは言わないし、帰りたいなんて言う人もいない。だれかが言い出せば、ぼくもそれにさん成しようと思っていたのに、みんなまじめに宮司さんの話を聞き、狂言が始まるのを待っていた。

宮司さんが下がると、六年生があいさつに立った。

「ぼくたちは、一年生のときから六年生の狂言を見てきました。だから、六年生になったら、この能ぶたいで狂言の発表会をたくさんの人たちに見てもらおうと練習をがんばってきました。伝とうのあるこの能ぶたいで、狂言の発表をするぼくたちのすがたを、どうぞごらんください。」

六年生は、ずいぶん真けんだなと思った。みんなも能ぶたいの方へ集中している。

なんだかぼくだけが、取り残されているみたいと感じた。

いよいよ狂言が始まった。

はかまに手作りのかみしもをつけた六年生が、真けんな表じょうで能ぶたいに登場した。地いきの人々が、いっせいにカメラをかまえる。けいだいはいシーンと静まりかえった。見ているほうも、みんな真けんだ。

ぶたいの上では大きな声がひびいた。昔の言葉づかいと長いせりふだけれど、六年生は、役になりきり、堂々としたえんぎをしている。

おもしろい動きとせりふに、ぼくも思わず笑ってしまった。たしかにおもしろい。

けいだいには笑顔があふれている。

そして場面が変わるごとにおくられる、大きなはく手。

そこは、えんじる側の六年生と、見ている側の地いきの人々が、一つになったような不思議な空間だった。

あつという間の、二時間が終わった。

最後に六年生があいさつをしたときには、けいだいが出たたび大きなはく手に包まれた。ぼくは寒さをわすれ、いつの間にかこの不思議な空間の一員になっていた。むねをはって、堂々

と能ぶたいに立っている六年生は、とてもかっこよかった。そして、ぼくも、あの能ぶたいに立ちたいと思った。

「はやく、六年生になりたいね。」
と、だれかが言った。

ぼくもみんなといっしょに、うなずいた。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。